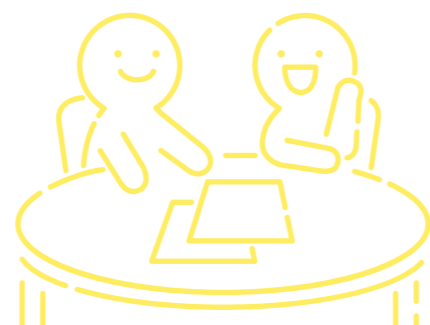


社会的処方の学校

事業報告書





contents

- 01 はじめに
- 02 社会的処方とは
- 03 社会的処方の学校でやってきたこと
- 05 ロードマップ
- 06 提言
- 07 事例集
- 09 インタビュー
- 13 講師対談

このたびは、社会的処方の学校事業報告書をお読みいただき、誠にありがとうございます。

今の社会で起きている少子高齢化・地方の衰退・地球環境問題・自然災害・貧困・格差の広がりなどの社会問題は、様々な要因が複雑に絡み合っており、ひとつの分野の専門家だけで解決することは非常に難しくなっています。

この状況を変えるために、私たちbond placeは「人と人がつながり、学びあう場づくり」を実践し、自らの手で目の前にいる人々を幸せにするために立ち上がる人々に関わってきました。

本報告書は、休眠預金事業 2020年度通常枠 草の根活動支援助成の実行団体として取り組んだ「社会的処方の学校」というプログラムの活動報告として作成しました。

このプログラムが始まった2021年は、コロナ禍によってより多くの人が孤立し、人と人のつながりをつくってきた地域コミュニティも活動の継続が困難になりました。ただその一方で、「こんな時だからこそ、人と人のつながりが必要だ」と立ち上がった人々も現れました。

社会的処方の学校は、そんな思いで立ちあがろうとしていた人々同士がつながり、様々な分野の実践や知見をシェアしながら、それぞれの活動の軸をより太くしていくことを目指していきました。

なぜ私はこういう取り組みがしたいのか？ どういう理想の姿を実現したいのか？を相手に語れるようになること。孤独・孤立の問題を、見えている出来事だけではなく、目に見えない構造や固定概念に着目しながら、より問題を理解できるようになること。これらを達成するために、各地域の実践者たちと一緒に学び合ってきました。

本報告書では、社会的処方の学校の参加者と共に学び合ってきたことをまとめるとともに、どんな参加者がどんな地域でどんな活動をしているのかもご紹介しています。

人と人のつながりを紡ぎ出そうと頑張る私たちが孤立しては意味がありません。孤立した人々を支えるためには、私たちが手を握り続け、地域全体で活動していかなければなりません。

この報告書を手にとっていただいたあなたも、誰かにとってのリンクワーカーになることができます。

あなたの想いを私たちにも聴かせてください。

芦沢 郁哉
NPO法人 bond place 理事

1992年生まれ 山梨県甲府市出身
大学生時代から子どもの学習支援等の地域活動に関わる。その中で貧困問題は学習の支援だけで解決できず、様々な要因が複雑に絡み合っていることを実感し、当時任意団体だったbond placeの活動に参加。山梨県内をメインに、様々な分野・地域でソーシャルな活動に取り組む人々がつながり、対話を通じて学び合う場づくりを実践している。



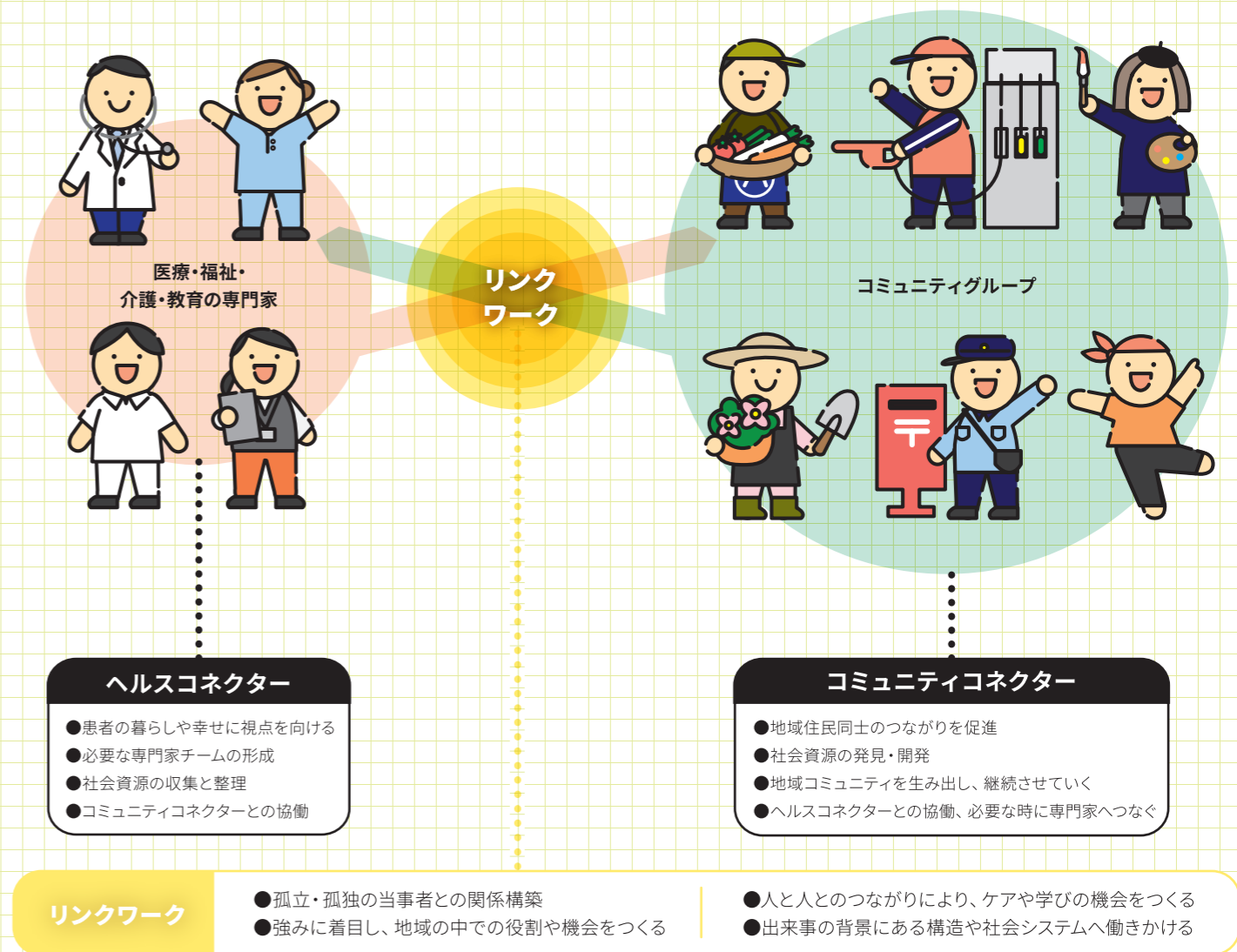
社会的処方

とは、薬と同じように社会とのつながりを処方することで、個々が抱える問題の解決を目指すものです。孤独・孤立を防ぐことが、その人の健康やウェルビーイングの増進につながり、また予防にもつながっていきます。

ただ、社会的処方は医療・介護・福祉の専門家だけで実現できるものではありません。

専門的な知識を持ちながら、医療・介護・福祉などの専門機関とつながっていくヘルスコネクターや、地域の中で様々なテーマでつながりをつくりだすコミュニティコネクターとの連携が必要です。様々な分野や立場の人々たちが連携してリンクワークを行うことで、目の前の人の幸せな暮らしを実現することができるのです。

社会的処方の学校では、このヘルスコネクター・コミュニティコネクターそれぞれの立場の人々が集まり、同じテーブルの中で学び合うことでつながりを生み出していきました。



同じ地域や分野であっても、立場によって見える景色や使っている言葉がガラリと変わります。普段なかなか出会えない違う分野の人々との学び合いによって、自分の言葉が磨かれ、より俯瞰した視点で物事を捉えられるようになることを目指しました。

第1期 (2021年度)

◆プログラムで扱ったテーマ

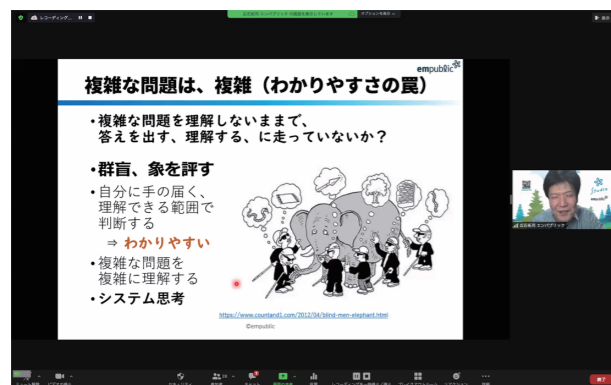
- ・対話の場づくり
- ・コミュニティ・オーガナイズing※1
- ・社会を変える計画づくり、ロジックモデル※2
- ・事例検討
- ・システム思考※3

●私たちのねらい

2021年度は新型コロナウイルス感染症による影響で外出自粛しなければならなくなり、多くの人たちが孤独・孤立の当事者になってしまったのではないのでしょうか。そんな時期にスタートした社会的処方学校第1期のプログラムには、山梨県内外から社会的処方というキーワードに関心を持つ医療・介護・福祉分野の方や、地域でコミュニティ活動を担っている方などがプログラムに参加してきてくれました。

「お薬と同じように社会とのつながりを処方する」といっても、ただ地域で人が集まるイベントを開催すればいいわけではありません。この人にはつながりがないから、いろんな人とつながれるような機会をつくるという直線の解決策ではなく、社会を変えていくという視点を持ってもらいたいとプログラムを企画しました。

具体的には、いくつもの要因が複雑に絡み合っている孤独・孤立の問題の構造を見ていくこと。根本にアプローチするために、どんな人どんな風に手を組んでいくのか。どんな風に戦略や計画をつくっていくのか。価値観や特技が違う人たちとどのように対話を積み重ねていくのかなどをテーマにして、参加者の皆さんと一緒に学び合う場づくりをしてきました。



社会的処方の学校でやってきたこと



words

コミュニティ・オーガナイズing※1

市民の力で自分たちの社会を変えていくための方法や考え方のひとつ。人のつながりを徐々に広げていくことで大きなパワーを生み出し、多くの人々が共に行動することで社会変化を起こすこと。

ロジックモデル※2

事業や活動を通して最終的に目指す成果（アウトカム）の実現に向けた事業の設計図。

システム思考※3

全ての物事を複数の要素が集まった「システム」として捉え、そこから生まれる複雑かつ難易度の高い課題に立ち向かうための考え方。「システム」の全体像を把握し、時間的変化を捉え、構造を俯瞰的に可視化することができる。



第2期 (2022年度)

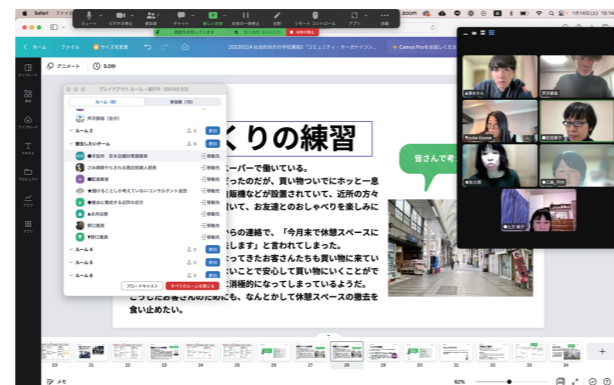
◆プログラムで扱ったテーマ

- ・コミュニティづくり
- ・システム思考
- ・コミュニティ・オーガナイズing
- ・実践発表

●私たちのねらい

第2期には、看護師やケアマネージャーといった医療・介護・福祉分野の方のみならず、起業・創業支援や子育て支援、学習支援や子ども食堂などの子ども若者支援などの分野で実際に地域活動を進めている方が多く参加してきてくれました。

プログラムの内容は第1期をブラッシュアップし、自分たちの現場で実践できるように、ワークを中心とした講座にしました。それまで我流でやってきた活動の目的や理念、どのような問題にアプローチしているのかなどを改めて言語化し直すことで、より自分の活動に自信を持つことができたり、新たなニーズや問題に気づいてアプローチが変化していった参加者もいました。



第3期 (2023年度)

◆プログラムで扱ったテーマ

- ・システム思考
- ・コミュニティ・オーガナイズing
- ・実践発表

●私たちのねらい

2023年度は、新型コロナウイルス感染症が5類感染症に位置付けられ、地域のイベントやコミュニティ活動も徐々に再開していきました。これまでオンラインでの開催となっていた社会的処方の学校も第3期はリアルに集合する形式で開催することができました。子育て中のパパやダブルケアなどのテーマでコミュニティ活動を実践してきた方や、これから地域でのコミュニティづくりの活動に取り組んでいく若者世代の方も参加してきてくれました。

システム思考の回では、「不登校」「ジェンダー」「子どもたちの学び」「子育て支援」「多様性」とテーマごとのグループに分かれて、うまくいくはずと思っていたことから起きる副作用を踏まえ、それぞれの分野でどのような問題が起きているかを考えてきました。コミュニティ・オーガナイズingの回では、そもそもなぜ自分がこういうことに取り組みたいのか、なぜ自分がアクションしたいのかを相手に伝えるために整理をしました。また、目標を達成するために、どのように戦略を立て、戦術を組み合わせていくかを、実践的なロールプレイを通じて学びました。



その他の取り組み

社会的処方の学校が本格的に始まる直前、2021年の冬には、プレ講座として「複雑な社会を生きていく上での知恵を身につけて実践していくための連続講座」を自主事業で開催しました。グラフィックレコーディングやNVC（非暴力コミュニケーション）、問いを立てることや場のデザインなどについて学び、それぞれの現場で実践した気づきを持ち寄ってくることを参加者の皆さんに求めました。一人ひとりの思いや計画だけではなく、社会について深く・広く目を向けていくための学びや機会の可能性を感じたことが、その後の社会的処方の学校の開催へとつながっていききました。



社会的処方の学校が始まってからは、講座の時間だけでは理解しきれなかったことを参加者同士がグループで復習したり、「自分が取り組んでいる課題をもっと深掘りしたい」と個別に集まり、システム思考・ループ図を活用しながら部活動のような雰囲気、議論を深めたりしてきました。時には、ある参加者がこれから活動を始めていこうとしている拠点に集まり、「ここでどんなことができるか？」とみんなでアイデアを出したり、他の参加者が開いている場づくりを応援に行くこともありました。講座はあくまでもきっかけのひとつであり、そこから生まれたつながりを活かして、意識や行動の変化につなげていった参加者の主体性が多く見られました。

◆参加者の声◆



自分自身にとっては参加したことで一度立ち止まって考える大きな転換点となりました。



様々な社会課題を持っている方と交流ができたことで、社会の見方を変えるきっかけになった。



自分自身の過去と現在、そして未来を見据え、自身の原体験や原動力の根幹にあるものを見つめなおし、「何のために」自分が活動するのかを改めて再確認することができた。



社会課題に対して、自分にできることが必ずあると思うようになった。



視点が広がり、選択肢が増える機会になった。悩みも『あの人がいたらどう考えるだろう』『この人に相談してみよう』『(逆に)相談に乗るよ』という仲間ができたことは非常に大きい。



社会的処方学校が提案する ロードマップ

現代の社会問題はいくつもの要素が複雑に絡み合っているため、その解決には多くの担い手が関わっていくことが不可欠です。しかし、これまで多くの場合、多様な分野やセクターと関わろうとしても、それぞれの優先すべきことが異なり、協働が生まれにくい状況がありました。そうした壁を乗り越え、多様な担い手が連携して社会問題の解決に向かっていく取り組みが生まれるために必要なプロセスを記したのがこのロードマップです。

スタート

私の思いを他者に開いてみる。
共感、つながりの連鎖が生まれる。

やってみたいことや、怒り・モヤモヤ・哀しさなどを他者にシェアして試みることから始まります。シェアすることで似たような関心事を持つ人たちとつながり、地域での活動に参加したり、新たな地域の情報を得たりすることで、より地域や社会への関心度が上がっていきます。

1



**多様な人たちと
一緒に「問い」を共有する。**
対話を積み重ねていく。

2

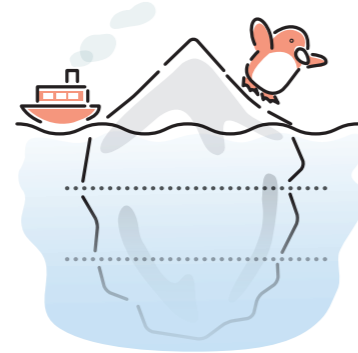
私たちは自分自身の経験や知識の範囲内の視点で観察し、理解することに慣れてしまっています。その状態のまま解決策を急いでも、そもそもの問題が見えていないことがよくあります。だからこそ、違う視点からヒントをもらうことのできる対話のプロセスが必要です。他者の力を借りながら多様な視座を使いこなせるようになるには、似た価値観の人同士の集まりだけではなく、多様な視点を持つ人たちの対話の場づくりが必要になります。

Road Map

**変化を起こすための
戦略を立てる。**
アクションを起こす。

4

社会問題の解決に向けた活動は、問題の複雑さや社会変化のスピードなども影響して、思ったようにうまくいかない状況に多くぶつかります。その状況を失敗ではなく、次に活かす学びのチャンスと捉えることで、活動の改善、継続力にも大きな影響が出ます。最初から正解を求めるような学び方ではなく、まずは小さく実践・ふりかえり・改善を何度も繰り返しながら学んでいく経験学習を組み込んだ実践プロセスが重要になります。



3

複雑な課題を構造から捉えていく。
システム思考を活用する。

現代の複雑な社会問題は、同じ状況でも立場や視点の違いによって解釈や優先度も変わってきます。その複雑さを捉えきれずに、わかりやすい一部分だけをピックアップして活動を行うことでは、短期的には一見解決されたように見えても、長期的には複雑でアプローチしづらい要素が放置されることになりがちです。その結果、より問題は複雑さを増して手遅れになってしまうということがよくあります。多様な視点から現状を理解し、多様な原因を分析すること。また現状への対応だけではなく、副作用や未来への影響についても議論を深める必要があります。

提言

リンクワーカーが活躍できる地域にするための3つのポイント

リンクワーカーが育ち、人と人との有機的なつながりが生まれていく地域づくりをしていくために、社会的処方学校の取り組みを通して見えてきた、3つの大事なポイントをお伝えします。

1 対話を通じた社会課題解決マインドの育成

対話は直接的な解決策を提供するものではありませんが、気づきや勇気を与え、個々の参加者が問題解決に向かって行動するための土壌を育みます。このような対話の場を提供することで、より多くの地域住民の地域参画を促します。

2 ファシリテーターの視点を持つ人を増やす

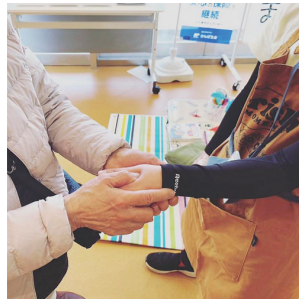
ワークショップの司会進行や問いの投げかけを行う役割としてのファシリテーターだけではなく、日常の中でファシリテーター的な視点を持つ人が増えることが必要です。何気ない会話を対話へと発展させることができる、ファシリテーション力を持った人が様々な分野・地域に点在することで、すぐに解決策に飛びつくのではなく、問題の本質を発見するための対話の場が生まれ、地域コミュニティの活性化につながります。

3 「場」が重要、「場所」も必要!

「こんなことをやってみたい」というアイデアを持つリンクワーカーたちにとって、人と人がつながる「場」が必要不可欠です。「場」とはアイデアを磨いたり、実現に向けた協力者とつながったりできる場所です。また、小さくチャレンジするための実践の「場」として、物理的な「場所」も必要です。公的な施設だけではなく、子どもを連れていくことができたり、自由な雰囲気の中でじっくり話すことができたり、面白い人や資源と出会う経験を通じてワクワクを感じてもらえる「場」をつくり出す。

まるカフェ

「まるカフェ」は、心の健康をいつもの日常の暮らしの中で支えるために立ち上げられた活動です。この活動は、2人のコミュニティナーサーがきっかけになりました。病院や相談所を訪れる前の段階で、地域の中でさまざまな人々と出会い、何気ない会話をすることで、誰もが「自分を理解してくれる人がいる」と感じられるような場づくりを目指しています。公園や郵便局、



クルマ屋さんなど、地域の様々な場所と一緒に子どもたちを見守りながら、お母さんたちがつなげる場をつくったり、講座の開催や他の地域活動に参加したりしています。まるカフェの活動を通じて、自分自身に温かい「まる」をつけてあげられる時間を届けています。

きっと Plus+

「きっとPlus+」は、社会の隙間に架け橋をかけ、誰もがつながり、居場所を見つけられるような社会を築くことを目指す活動です。「できない」を「できる」に変えることをテーマとし、多様な背景を持つ人々が繋がることで、新たな可能性を生み出すことを目指しています。この活動は、作業療法士として働く同期2人によって立ち上げられ、彼らの熱意に共感した仲間たちが次々と加わりました。高齢化、少子化、認知症、発達障害など、



複雑に絡み合う社会の課題に対して、多様・多世代・多彩な取り組みが生まれるきっかけづくりをしています。ユニバーサルデザインに関するイベントの開催や情報交換の場を通して、共に学び、成長し、社会の隙間を埋めていくことを目指しています。

ゆるい読書会 わかりえないを超える

「ゆるい読書会 わかりえないを超える」は、甲州市の対話を愛する僧侶松山さんによって開催されているユニークな読書会です。この読書会は、読書や対話を通じて自己と向き合い、他者とゆるく繋がれることを目的としています。持ち物は本のみで、初めての参加者も歓迎されています。答えを求めるのではなく、問いやモヤモヤを共有し、

深めることを大切にしています。この読書会は、人間関係や日常生活でのコントロールできないことに対する自覚を深め、手放すことの重要性を探求する場となっています。読書会の中では、他者との対話を通じて自身の内面に目を向けることで、新たな気づきや理解を深めることができます。



ヘルスコネクター 事例集

Health-connector

ソーシャルハウス宝島

「ソーシャルハウス宝島」は、山梨県富士吉田市にある共生をコンセプトとした新しい形のコミュニティ拠点です。2022年4月にスタートしたこの場所は、人と人とのつながりから生まれる素晴らしい作用を「宝物」と捉え、多様な背景を持つ人々にとっての第二の家となることを目指しています。地域の高齢者が交流する場、女子サッカーチームとの交流、子どもたちのためのフリースクール、地域サロンの



開催など、さまざまな活動を通じて、支え合いの精神を育てています。高齢者、性的マイノリティ、外国人、生活困窮者を含む誰もがノーボーダーで受け入れられるこの拠点は、知らないことによる無理解や偏見を解消し、多くの人々がつながるための場を提供します。年間延べ3,000人が集まるソーシャルハウス宝島は、ともに過ごす豊かさを共に見つけたいと願うメンバーをいつでも歓迎しています。



まるっと舎 era

「まるっと舎era」は、山梨市の深い山々に囲まれた一角に位置する、ユニークな一棟貸しの宿泊施設です。限界集落の空き家を活用し、アウトドア愛好家や大家族にも対応できるよう、広大な土地を活かしたお宿を提供しています。このお宿は、昔ながらの趣を保ちつつ、現代の生活様式に合うようにリノベーションされた古民家で、山梨の壮大な自然の中でバーベキューや焚き火を楽しむことができ、自然との一体感を味わえます。



「まるっと舎era」を立ち上げた福原千晶さんは、作業療法士としての経験を活かし、人々が自分らしく生きられる社会づくりを目指しています。「いいら」の精神—山梨の言葉で「いいじゃん、いいじゃん」と許容する心を持つこと—を基に、自然の中での活動を通じて、多様な人々が自分らしい生活を楽しめるようサポートしています。空き家の有効活用から始まったこの取り組みは、限界集落の活性化にも貢献しています。

Community-connector

コミュニティコネクター 事例集

hottos ホットス



「hottos ホットス」は、2021年秋にスタートした山梨県富士川町での温かい取り組みです。この活動は、産後のママや一人子育てを頑張る方々に、手作りの応援弁当をお届けすることで、少しでも「ほっとするひととき」を提供したいという想いから生まれました。産後の身体の痛みや睡眠不足、自分の食事にまで気が回らない忙しさ、誰かと話したいという切実な願いに応える形で、山梨県富士川町にお住まいの産後ママとそのお子さんを対象に、現在では富士川町のヤマナシベンジカーリーの手作りお弁当をお届けしています。

このプロジェクトは、休眠預金等活用事業の助成を受け、リユース食器のレンタル事業を行ってきた認定NPO法人スペースふうが地域団体・個人の協力を得ながら運営しています。リユース容器を使うことで、届けて終わりではなく、食べた後にもコミュニケーションの機会を作り出し、人と人とのつながりや交流を深める役割も果たしています。使い捨てではない弁当箱を通じて、食べた感想や雑談を交わすことができ、弁当箱を洗う人々にも仕事を提供し、資源を大切にすることを育てています。「hottos ホットス」の活動は、産後ママへの直接的な支援だけでなく、リユース文化の促進と地域コミュニティの活性化にも貢献しており、参加するすべての人々にとって価値ある取り組みとなっています。

SHIELDS (シールドズ)

困難を抱える女性の現状と支援のあり方を考える

「頑張れ！」よりも当事者のいまを守りたい。様々な困難を複合的に抱える女性の生活再建・自立に向けての包括的な支援のあり方を考え続け、地域社会で支援に取り組む人々など連携先を増やして取り入れ、県下でシェルターやピアサポートなどの活動を行う民間団体や行政などへの協働の呼びかけを始めています。

ですが、当事者だけでなく支援者も孤立させないための必要性を強く感じ、また一時的な避難からの日常を取り戻す過程を大切にすることに、加害者の更生という視点も取り入れ、県下でシェルターやピアサポートなどの活動を行う民間団体や行政などへの協働の呼びかけを始めています。



妄想10年、障がい児にフィットするオムツや医療的ケアのグッズを
かわいくしたいという野望を持ちながら、なーさんが楽しいと思
うことを一緒に体験することで、障がい児とその家族のための遊び
と出会いの場づくりを創出しています。今回は、活動を始めて一年
目が終わった直後にお話を聞き、これまでのこと、そしてこれか
らのことを教えていただきました。



ヘルスコネクターへのインタビュー

「知らない・苦手」を「楽しい・またやりたい」に変える 「なーさんのひきだし」

bond placeから見たなーさんのひきだし

看護師の顔を持ちながら、地域へ飛び出しコミュニティづくりを始めたなーさん。専門職として親子に
関わるだけではなく、地域で親子同士が支え合うようなつながりをつくりだしています。なーさんが作
る場の中では、誰かに支えてもらうばかりではなく、他の親子の支えになることもできる。そんな双方
向のつながりの中で成長する親子の姿がありました。

「なーさんのひきだし」について

芦沢 「なーさんのひきだし」は具体的に何をされていますか？

なーさん 療育（※）に特化した親子遊びサークルを開いています。「遊び」
からは、生きていくのに必要な様々な力を吸収していくことができると考えて
いて、遊びながら自然に楽しくリハビリができることを目指しています。
例えば手があまり動かない子がいる場合、リハビリでは手を伸ばす運動をし
ますが、家ではなかなか訓練の先生みたいにできない。けれど、遊びの中で
楽しんでやることで、リハビリと同じ効果を得られることができなかなと考
えました。少し離れたところに置いてあるぬいぐるみを取ることも「ママと競
争だよ」と言いながらやってみると、本人に取りたい気持ちが生まれて自然と
腕が伸びる。更にママたちが頑張らなくて後押しもできたら、それは立派なリハ
ビリであり、遊びです。そんなケースを増やすことを目指して活動しています。
子どもが障害を持っていると孤立しがちで、どうしても引きこもってしまう
家庭が少なくありません。しかし、同じような状態の家族が多く集まってい
て、雰囲気も良い場があれば、そこに集まるハードルが低くなって、より来や
すくなる。

来るだけで自分の家族以外の人たちと出会うことができ、それだけで社会性
が生まれる。好奇心とか探求心、集中力、工夫する力とか言われているもの
を、そこで遊びながら経験していけばいい。「分からないから怖い」とか「苦
手だからやらない」を、「楽しい」とか「好き」、「またやりたい」という風に変
えていく。参加する一人ひとりの「ひきだし」を増やして、家に帰ってほしいな
と思っています。

芦沢 障がいを持っている子どもたちや家族にとっての遊びの機会とか、場
を作るのは難しいですか？

なーさん どうしても走り回る子が多いので、普段はそれを追いかけるだけで
精一杯、ケアすることが優先で、遊ぶことまでできないという声を多く聞か
ます。また、好きなものを買ってみても、どのように子どもが遊べいいか分
からないということで悩んでいる家庭もあります。

※「療育」・・・発達支援の一つで、障がいがある子どもや可能性がある子ども
たちに対して、個々の発達状況や障がいの特性に応じて、困りごとを解決し
たり、将来を見据えた自立や社会参加を目指して支援すること。

例えば重症心身障害（以下、重心）の子がいて、音が鳴って回るおもちゃがあ
るけど、ずっと上を向いているだけ。それを遊んでくれないと考えると、目の前
に持っていったり、抱っこしてお母さんと一緒に見るなど工夫することで、見
えなかったものが見えるようになります。

また、その様子を他の家族に伝えたり見てもらうことで、自分の家でできそ
うなら持って帰ってもらおう。いまは私が伝える役ですが、できれば各家庭ごと
のシェアで「そういうやり方あるんだ」とか「これも遊びになっちゃうんだ」と気
付けてもらうのが理想です。

芦沢 本人たちの成長のためには遊びが必要というのは専門機関からでも伝
えられます。しかし、遊んでと言われても、具体的にどうやっていいのかわか
らないということがあるんですね。

なーさん 外に行ったら走れと言われても走れない。でも私の中での「走る」
は、「どうやったら走れるようになるか？」なんです。例えばバギーに乗って外
に出ることができるなら、子どもをバギーに乗せて、お母さんが走ればいい
じゃんって。それって「走れる」ですよ。

プールもそうです。「入れないから泳げない」ではなく、「泳ぐにはどうする？」
から始めてみて、抱っこだったら入れる？浮き輪を使ったら？まだ水が怖いん
だったら、まず洗面器の水でやってみる？お風呂ではどう？と、どんどん想像
を膨らませて、できそうなことを一緒に考えています。できないじゃなくて、ど
うやったらできるかを考える。

現在の活動に至るまでの背景

なーさん この活動を始めたきっかけのひとつは、あるお母さんの話を聞い
たことです。その方がお子さんを支援センターに連れていったときに、子ども
の年齢を聞かれて、「2歳何ヶ月です」って答えたそうなんです。でもそのお
子さんは、それぐらいの年齢の子であれば一般的にはできるはずのお座りや
お話がまだできなかった。そうすると「あ、2歳なんですわー・・・」みたいに、
気を遣われる感じがとても伝わってきたという話でした。そうやって気を遣わ
れると、もうそこには行けないと思ってしまふ。その方だけでなく、たった一回
で行けなくなってしまうお母さんが多いという話を前から聞いていたので、実
際に体験した人からお聞きして「これが・・・」と。

誰でも遊びに行きたい場所のはずなんだけど、行けない人もいる。人が来な
ければ、必要な人がいないと判断されてしまふ。そこがすごく怖いところです。
どんなに「いつでも来ていいですよ」と言われても、そこに行けない家族がい
るんだよということも、もっと伝えていきたい、重心の親子が気軽に行ける場
所がないなら、自分で「ひきだし」を作ろうと思いました。

芦沢 専門家や家族だけでは、できないことが目が行きがちになります。しか
し、第三者とか他の家族の関わりがあることで、その人たちと一緒に考えるっ
ていうことが、とても大事なことなのかなと思いました。

なーさん 他のご家族を見るっていうのがすごく勉強になるって言われます。
「こういうふうにしていいんだ」「やってみようかな」と思えるようです。他
のお父さんたちはどうしているのかとか。あとやはりこういう場所がほとんど
無いので、お母さん同士で話す機会がまだ少なく、繋がれることが本当に少な
いんだなと感じています。「なーさんが色々やってくれるのは嬉しいけど、ただ
会を開いてくれるだけでも、行くだけでも楽しい」という風に言ってもらって
ます。

芦沢 障がい者自身ではなく社会に問題があるという認識は、福祉の人た
ちを中心に広がっていると思うんです。でも誰も何もしなければ放置されてし
まふ。そこで、同じような背景を持つ人たちが集まることを繰り返し、安心して
子どもを行かせられる場を作ることが、私たちにできるのか問われています。

なーさん 最近考えていることなんですけど、よく育児書には「2歳だとこれが
できる」と書いている場合があります。でも「こういう動きができるようになったら、
次はこういう遊びもするといいよ！」というように、年齢で区切らずにそれ
ぞれができることから考える本があってもいいんじゃないでしょうか。例えば
スプーンとかおもちゃを舐め始めたら、こういう発達が出てきているから、次は
もっとこんなことを取り入れるといいよとか。ゆっくりだけど、この子も発達成
長していくので。

芦沢 学校の子たちも、そうだと思うんですよ。6歳になったら小学校に入っ
て、12歳になったら中学校に行く。今の教育は何でも年齢で区切るし、そこ
に同調圧力を感じます。

なーさん 障がいがあるから騒ぐのではなく、子どもは騒ぐよね。大人だって
騒ぐときあるし。学校に行けない子たちが、勉強できないわけでもないし、年
齢でこれはダメとかじゃなくて、本人が「障がい」を持っているわけではなく、
周りの環境が「障がい」を作っている状態、障がいは、環境の側にあると
考えます。

「なーさんと遊ぼう！」みたいな日をいつか作りたい。子どもだったらみんな
おいでよ、みたいな感じでやりたいと思っていて、そこには障がいがある子も
ない子もみんな来て、新聞紙とか、同じ共通のもので遊ぶ。で、この子たちが
遊ぶことで、この子たちが楽しいと思えるものって一緒なんだよ、というところ
が分かってくるといいなと思います。

芦沢 今まではやらなかったんだけど、ちょっとだけ背伸びしてやってみちゃっ



なーさん▶

山梨県甲府市在住。児童発達支援セン
ターで看護師をしながら、保育士の資格
も取得し、療育に特化した親子サーク
ルの活動に取り組んでいます。



た、そういうのがシンプルに本人の自信に繋がるんだと思うんですね。

「なーさんのひきだし」のこれから

なーさん 療育を知ってもらって活動はまだ一年しか経ってないので、もっと
サークルの存在を知ってもらいたいです。こんなことやってる人がいるんだと
か、様々な関わり方をしたいんだとか。この子たちに触れていい、声かけて
いい、街中にも「なーさんの引き出しで、ああいう子たちいたな」と思い出
したり、考えたりしてもらえきかけになったらいいなと思っています。

芦沢 もう少し踏み込んで、まずはこういう人たちに知ってもらいたい、繋
がってほしいなどはありませんか？

なーさん 障がい児を持っているサークルだけじゃなくて、子育てサークルを
やられている方たちや団体さんと協力できたらいいです。共有できる遊び場と
して、イベントなどをやってみたい。

やっぱり子どもたちが楽しいと、お母さんたち嬉しいじゃないですか。で、お母
さんたちが嬉しいと子どもたちもやっぱりニコニコ嬉しくなるから、嬉しい輪が
たくさん広がるっていいなって思うので、まず子育て世代の方達と繋がれたら
いいなって妄想してます。

芦沢 更にその先、なーさんのひきだしという活動自体がこうなっていった
らいいとか、社会がこういう風になっていったらいいという部分は？

なーさん 活動としては原点に戻って、例えばNICUや小児科から退院したお
子さんにどう関わっていいかわからないというご家庭があれば、「とりあえ
ず、来てみたら？」ということをやりたいです。

「ひきだし」があるかないか、わからない子たちが対象でもいいんです。その可能
性があるかもしれないよっていうお子さんに早期から関わらせてもらいたい。
やっぱりお母さんたちは家にもやりやすいですし、独自の手法で長年やってきて
しまったためになかなか変わることができない。だから、ちょっと早めから関わ
らせてもらって、本当はいろんな選択肢があるんだということを伝えていきたい。
そして今後は赤ちゃんの時期から私たちの活動の対象に、と考えています。

また、障がい児を持つお母さんたちが困っていることを吸い上げて、それらを
まとめて住民の意見として行政に伝えていくことで、違う視点からも社会が変
わっていくのではないかと考えているので、その橋渡しをしていきたい。

あとは、防災関係です。いま地震が来た場合、要支援者がどこにどれくらい居
て、どのような状態になるか、ちゃんと把握できていないのではないかと
思います。いざという時のためにも、日常的にご近所さんでもっと繋がれたり、声
をかけられる雰囲気を作っておくことが大事なんだと思います。

多様性と言われている中で、まだまだ障がいを持っている人に対するの偏見
が多い気がします。もっと「誰でもそこに居ていいんだ」という価値観を広
げていきたい。障がいを持っている人がいても「バリア」があれば、それを
周りのみんなで取り除ける社会にしていきたいです！

女性起業支援(※)のコミュニティーマネージャーを務めながら、それぞれ同時期に、社会的処方学校を受講したトモペイ、地元行政と起業支援を主催しているみもりんのお二人に、オンテンパールの立ち上げ秘話や、日々の試行錯誤についてお聞きしました。

※山梨県主催「co+shogoto」、甲府市主催「Can-Pass」。いずれもbond placeが企画・運営。



▲オンテンパール結成の瞬間(女性起業支援ふりかえり会にて)

コミュニティコネクターへのインタビュー

地域で動き出す人をうっかり応援「オンテンパール」

bond placeから見たオンテンパール

地域の中で「こんなことをやってみよう」というアイデアを持っていても、自分にできるのだろうかと不安を抱えている人はたくさんいるのではないのでしょうか。そんなアイデアの種を持つ人たちに寄り添い、その人の活動を応援する人たちの連合体がこの「オンテンパール」です。各地でプレイヤーの応援をしてきた人たちが連合体としてつながることで、各地域のリソースや知見がシェアされていきました。

改めて、オンテンパールって何ですか。

みもりん 女性起業支援が終わった後、これからどうしようかってなったんです。なんか面白い動きをしている人たちが集まっていることに気付いて。そんな時に、女性起業支援のコミュニティーマネージャーとして私たちが個別相談の定番の日に「何だかんだ言って私たちってお転婆だね」って話になって。じゃあ自分たちで何かやる？ってなって、それがオンテンパールだ！みたいなことになって。その時はまだ本当に何をやるかも決まっておらず今も曖昧なのですが、とりあえず始めてみました。

トモペイ 「オンテンパール」っていう言葉が「お転婆」の語源であることを知って、面白い響きだねってなって。そこからは、何か楽しいことがあると「オンテンパールだね！」みたいノリで、自分たちの中で流行り言葉になっていきました。今のところオンテンパールって組織の名前ではなく活動のことなのかな。

みもりん 活動っていうか、概念みたいなものです。「楽しさが多め」のことがオンテンパール！みたいな。まだ法人でもないし、団体でもないけど、私たちがやっていることが「オンテンパールって」みたいな感じで言えちゃう。

トモペイ 私の中ではこれまで、仕事って辛いことや大変なことが当たり前。誰かにやらされているというイメージもあって、不得意なことも乗り越えてこそその仕事だぞっていう価値観で育てられてきました。だけど、オンテンパールが始まってから、「楽しい」で仕事できるんじゃない？っていう感覚が生まれたり、何でも乗り越えられるんじゃない？って思い始めることができて。実際にどうやったら「楽しい」で仕事ができるかって言ったら、「得意なことを得意な人がやれば良い」と思えるようになったというのが、私の中の大きな変化です。

芦沢 とにかく考えるより動いて、自分一人で頑張ってる苦しんでいる人たちのところに、どんどん会いに行き、そこでみんなでアイデアを出し合って、そうすると勝手に人が繋がって行くということですか。

トモペイ 私が誰かに何かを頼むじゃないですか。これって絶対無理だよな、断られるよなと思っていても、「いいですよ」って言ってくれるんです。「それは人徳だよ」と言ってもらったこともあるんですけど、ずっと違和感があった。そしたら「トモペイさんのやることって楽しいが基本だから。楽しい人に着いていけば絶対楽しいはず」という期待がある。その楽しさの純度がトモペイさんは高いんですよ」って言ってもらって。「これだ！」と思ったんです。

この人といれば得るかもということじゃなくて、この人と一緒だったら何でも楽しいって思えるかもっていう期待、絶対にハズレはないって思ってる期待感があるから、ちょっとしたワガママでも、なんかノリでOK！って言ってくれるんじゃないかって。

それも私個人じゃなくて、オンテンパールの全員がそんなんじゃないかなと思うんです。

芦沢 一人でやらなきゃいけない状況だったら、ただのコストや手間だったものが、みんなの知恵とか工夫を絞ることで楽しさに変えていって、そこから何かを得られる学びに昇華していく集団なのかもしれませんね。

現在の活動に至るまでの背景

トモペイ 上手く人に頼れないっていう人が、意外と多いんですよ。それをどうにかしたくて、「頼ってもいい集団」がオンテンパールだと言っていきます。「頼ってもらっても私たちは嫌だと思わないよ」というのを、どうやってその人に合わせて言語化して伝えることができるのか、そんなことを日々、暇があれば考えています。だから、オンテンパールはしほませない。しほませたく無い。

芦沢 一気にいかず、ジワジワいく感じですね。

トモペイ 私たちが気付いて「それやれるから、じゃあ頑張ろう！」という時に、「助かりました」って感謝されるけど、本音ではもっと早く声かけてくれたら、もっと楽だったじゃんって思うことも多いです。ギリギリまでひとりで頑張るけど、結局は無理！ってなって、その頃には素直にヘルプが出せなくて・・・という人が多いから、そのヘルプをどうやったら出しやすくなるのか、私はいつも気になっています。

芦沢 地域のたくさんの方が、それぞれにSOSの出し方が上手くなれば、オンテンパールが楽しめる活動エリアが増えていくイメージがあります。SOSを言うのって難しいことですよね？

お節介をやり過ぎちゃうと、その人たちの声のあげ方は実際にはそんなに上達しない。でも、声をあげて良いということを知らない人も多いし。

トモペイ オンテンパールでも言われますが、何かヘルプを出すとお金が発生するんじゃないかとか、忙しそうで声をかけるのも申し訳ないとか、私なんかのために時間を使ってもらうのが悪いなどと言われる方が少なくありません。

ん。そんなの全然いいんだよって思うんですけど、言葉だけでいいんだよって言うても、なかなか信憑性がないみたいです。

いまはとにかく活動をみんなに外から見てもらって、「それってありなんだ」っていう風に思ってもらえると、凄く上手く回って予感しています。

みもりん それこそ私たちは黒子でもいい。別に名前を売りたいわけではなく、名も無きスタッフでいいから、その場がより楽しくなるだけで全然いい。あとはこの活動が持続すればいい。

だからずっと楽しく続けたいし、その中で私は潤滑油みたいに、たまに動きが悪くなったら投入してくれれば、こっちで勝手に盛り上げるから。そんなことを続けていきたいです。

芦沢 自分たちで自由に使える箱を作ったっていうか、チーム名でも活動名でも名前をつけたことで、自然体で動き始めることができたということでしょうか。

トモペイ コミュニティマネージャーで止まっていたら、私たちを認識してくれる人たちが、講座に参加してくれた人たちだけになっていたと思います。でも、オンテンパールという母体があることで、気軽に「ここにおいでよ！」って言えるようになりました。

みもりん コミュニティマネージャーって、そのプロジェクトが終わったら解散な感じがするけど、オンテンパールは無くならないじゃないですか。

トモペイ 自由に動けるし、「女性起業支援じゃないのに申し訳ないですよ」と言われても、「違うの。私オンテンパールだから！」って言えちゃう。双方にとって良い言い訳になるし、もっとみんなに使ってもらえればいい。

私たち基準でお節介する時に、「あ！違うの！違うの！私オンテンパールなの！」

「ああ！なるほど！じゃあお願いします！」っていうのが広がればいいな。それぞれの価値の提供のし合い。そこにお金が発生しなくても別にいいじゃん、みたいな。手取り早いのは一緒に仕事や活動をする体験。それって感覚的なことじゃないですか？感覚って、その人にとって誤魔化せない本当のことだと思うから、一緒にやってみて、この人違うな、違和感あるなって思ったら、その時点で無理だなって気付くこともできるし。

私たちが初めからの凄く仲良かったわけではなく、一緒に活動する中で作られてきた関係性なんだと思います。

「オンテンパール」のこれから

芦沢 1年後どうなっていたらいいですか？

トモペイ オンテンパールが加速したのって女性起業支援だけじゃなく、「こどもみらい応援委員会」※の存在が大きいと思います。山梨県27市町村、全てに応援団というか、その応援委員を配置したいという基本的な考えがあったらいいかなと思います。



て、それと似てるかなと思います。

オンテンパールの素質を持ったリーダー的な人が各地にいて、自分の語れる無理ない領域で、ちょっとしたことを手伝えるっていうのをやっていけば、次の景色が見えてくる気がします。

みもりん 共通の言語も作っていくし、仕事で同じ苦勞もして、壁を感じるポイントも同じで、起業支援ってこうだよ〜みたいなのを会った瞬間に語り合える人が増えていく。

そうだよ。私、もともと同じ目線で話せる人が欲しくて、起業支援を始めたんだ。

同じように苦勞をしたから、同じような境地に至って、同じような視点で立てる人だったら、きっと同じ目線で話ができる。県内各地で、その地域のリーダーさんの所で、わーって集まって、次は別の地域のリーダーさんの所に行ったり、家に来てもらったりとかして。何だか楽しいなって。

トモペイ まずは地産地消というか、いまは県外のことは全く考えてなくて。いまのメンバーも住んでいる市町村が違うので、県ごとじゃなくて、各地で勝手に盛り上がっていらいたいと思います。

芦沢 今のオンテンパールみたいな動きを1人でしろと言われてたら難しいなという印象があります。

トモペイ 絶対壁にぶち当たるんですよ。一人でやると。仲間がいれば乗り越えることもできるんだけど、じゃあ仲間って何、何処にいるのとなると、いま居る人たちだけで動かせないってなっちゃう。

組織とかでも同じような状況で、でもオンテンパールがいれば、自分で立っている個人の集まりだから、その時々で必要な人たちをマッチングすればいい。

みもりん オンテンパールって入会規則とかも無いので、ちょっと入ってみて「きみ、オンテンパールだよ。」みたいな感じで増殖していくと良いと思います。特に自分がなりたいて言われても入れるわけでもなく、そうかと思えば、何となくオンテンパール界隈に関わってみたら、今日からあなたもオンテンパールって感じでもあるし。具体的な定義もないしね。

トモペイ 唯一あるのがオープンマインドとサービス精神だと思いますが、きっと新しい仕事生まれる瞬間って、こういう事が起きるんだと思います。

それまでみんなが見たことない仕事って、どうやって説明して、どう例えるのってなる。それらの探求に、次の時間は費やしていきたいかなと思います。って、こうやってどんどん先延ばし。

みもりん ちょっとね、いまは個人の時間が足りないねーって。

トモペイ 私たちみたいな人たち(支援する側)も支援されなきゃいけないとも思ってる。私たち、すっごく稼いでるかっていうと、そうでもないんです。だから時間を半分にして稼ぎを倍ぐらいいにできるぐらいの働き方を、まず私たちが体現していかないと(笑)

※こどもみらい応援委員会:「こどもたちの未来を明るく照らし、支援する人が孤立せず安心できるようになる」ことをコンセプトにオンライン座談会や情報発信などを行っているプロジェクト。

みもりん ▶

山梨県甲府市在住。オンテンパールのムードメーカー。パラレルワークを通じて独自のキャリアを重ね、ファンも多い。



◀ トモペイ

山梨県甲府市在住。オンテンパールのコアメンバー。子育て支援の経験を生かした視野の広いコミュニケーションが得意。



孤独・孤立問題への挑戦 ソーシャルワーカーの視点から

対談者 太田 隆康さん(相談室あめあがり)／右田 達さん(コミュニティハウスはぐる・う)
／芦沢 郁哉 (NPO法人bond place 理事)

実施日 2024年1月14日(日) @コミュニティハウスはぐる・う

孤独・孤立の解決へ ：専門家の視点と挑戦

芦沢： 孤立と孤独の問題についてお聞きしたいと思います。孤独・孤立対策が目まぐるしていますが、問題の定義が曖昧で解決策が難しいと感じています。お二人にとって、孤独・孤立の問題はどのように捉えられていますか？

太田： この問題の難しい点は、孤独・孤立の当事者の声対策を考えていく人たちに届きにくい点です。本当に孤独な人の悩みを理解し、その悩みにどうアプローチするかが鍵だと思いますが、孤独な人たちは集まること自体が難しく、その人たちの声を聞くこともまた難しいです。
右田： 「孤立無縁」に注目し、孤立すれば無縁になるという援助や縁の断絶が問題だと考えます。誰かとつながっていれば、生活に関する問題を発信できる可能性があります。しかし、孤立無縁の人たちにとって、この縁がないことが生命の危険や健康、貧困のリスクにつながると感じます。

アウトリーチ型支援へ

芦沢： こうした状況の中で注目されているアウトリーチ型の支援について、太田さんのご意見を聞かせていただけますか？

太田： アウトリーチ型支援が実現できれば、多様な取り組みができると思います。しかし、なぜかそれが十分に機能していないと感じます。支援者個人の問題なのか、支援の仕組みの問題なのか、どこに問題があるのか、といった点に議論の余地があると思います。

多くの支援現場では、課題解決型の支援が主流で、長期的な伴走支援がどれだけ広まっているのか、という疑問があります。

芦沢： アウトリーチ型の伴走支援は、その人との関係性や実情の把握が重要となり、単純な課題解決

ではないと感じます。専門家としての視点や組織のルール、そして相談者のニーズとの間で揺れがある中、アウトリーチ型の伴走支援を進めるにはどうすればよいでしょうか？

太田： 伴走型の支援には「互助」的な部分があり、関係性の中で伴走していくところがあります。ただ、その伴走型支援を公的な枠組みで行うと、なかなか難しいです。社会全体で互助が薄れる中で、どうやってアプローチするかが大事だと思います。

右田： 公的なサポートが明確でないと、個人の努力だけで支援が行われている感じがします。そのため、支援者側も薄氷の上で支援しているのが現実です。その難しさを理解し、社会に共有することで、互助の復活や社会全体での支援体制の構築につなげていくことが重要だと思います。

芦沢： 伴走型支援において、公的なサポートが整備され、支援者側も安心して活動できる環境が整うことで、支援の難しさに対処する一助になるかもしれませんね。

成果指標を自ら示していくこと

芦沢： 現場で支援を行う人たちが、目の前の人と一緒に「これからどうなっていきたいか」を考え、成果を追求していく姿勢は大切です。その中で、とても難しいことですが、現場の価値を伝えていくことができるソーシャルワーカーが今後は求められていくのかもしれませんね。

太田： 例えば、「障害は社会にある」という考えは広く共有されており、支援に取り組む際は当事者だけでなく社会全体を見るべきだと教科書には書いてあります。ただそれが当たり前でできていない現状があるように感じています。

芦沢： 教科書に書いてあることを当たり前にやるのが難しいというのはどういうことでしょうか。

太田： ひとつは、個人に対する責任論が社会の中で強すぎることです。問題が起きたら、個人に原因が

孤立や孤独といった社会的な課題の根本に迫るべく、今回は2人の経験豊かなソーシャルワーカーとの対談をお届けします。彼らは専門家として社会のさまざまな層に広がる孤独・孤立の当事者と関わってきました。また、単なる専門家の枠を超え、地域の人々やコミュニティ活動と連携することで、問題解決へのアプローチを模索しています。この対談では、彼らの地域での実践から得た知見を深掘りしていきました。さらに、ソーシャルワーカーとしての活動を志す人たちに、未来への道筋や課題についても深く語ります。社会の課題に真摯に向き合う二人のソーシャルワーカーの言葉から、新たな視点と希望が生まれるかもしれません。

あって、その人が悪いから問題になっているという認識がされがちでした。経済的な困窮がある場合は、その要因に病気や仕事上の問題、障害などの社会的な背景にも注目して議論をすべきでしょう。

右田： 仕事の中で、路上生活者が生活保護を受給し、アパートを借りて一人暮らしを始めるまでを支援したことがあります。彼らをどこにつなげるべきかわからないという課題がありました。特に男性の場合、自分の弱さを示すことが難しく、仲間作りも苦手な人が多かったです。しかし、彼らの経済的な問題が彼らの健康問題や社会的損失につながっていることを考えると、地域との繋がりが重要だと声高に主張される一方で、そのリソースがない現状が問題だと感じます。

太田： 最近、「おじさん孤立問題」について議論しました。40代や50代の男性が孤立するのは、障害の有無や状況に関わらず、結構普通に起こることなんです。実は、この孤立するおじさんたちの受け皿は昔はスナックが果していたんですよ。

右田： なるほど、確かに。

太田： かつては、スナックでママと話すことが、孤立しがちなおじさんたちの間で一般的でした。ただ、その時代と今と大きく変わったことは、スナックに行くお金がなくなった。孤立しがちな人たちは、自分の孤独感を紛らす場所もなくなり、家に帰るしかない状況になったんです。おじさんをとりまく環境にも変化があったと言えますね。

右田： 確かにそうですね。でも、孤立しているかどうかを判断するのは、実は専門職にも難しいと思います。専門職だからといって、必ずしもすべてを理解しているわけではないですし、相手も専門職だと思うから、なかなか言いづらいこともあります。生活保護を受けながらスナックに行く人なんて、なかなか自分から言いにくいですし、そうするとパッシングを受けるかもしれないという気持ちにもなるでしょう。

太田： それに関連して、福祉職が貧困だということもあります。福祉職の人たちに金銭的に余裕がないと、たとえば生活保護を受ける人が持っているものに対して、嫉妬する。大きなテレビを持っているとか、高級品を持っているとか、そういうことが言われると、「なんで俺にはないのにあいつが持っているんだ？」って思ってしまう。

浪費家、ぜいたくといった問題にしてしまう。専門職が、なぜそうなるのか考えると、その人の悪い点や問題点に焦点を当てすぎているんですよ。本来は、「その人が望む生活」を実現するためにどうやって支援するかを考えるべきなんです。

右田： その通りですね。

太田： 一方で、「あの人は生活保護なのにぜいたくしている」というようなパッシングは表に出やすいですが、生活保護を受けていても生活の自由度があることが知られていません。

生活保護受給者に対するパッシングは、社会がその土壌を作り出しており、専門職や地域社会もその一端を担ってしまっていると思います。

芦沢： 皆の生活水準が下がると、「あの人は！」というようなパッシングが起こり、住民レベルでも同じような現象が見られるんです。

太田： そういう状況で、感情的になって何かを動かすのは簡単ですが、本質的な問題を考えることが重要です。近年、物価が上がっていることについて私は「もっと上がれ！」と言っています。みんながデフレの時代に慣れすぎて、「安いことが正義」という考え方が浸透した結果、給料も上がらないし、貧しくなりました。

アメリカでは物価が上がっても給料も上がっているんです。私は、給料が上がら、物価が上がら、社会保障も充実していくような状況になればいいと考えています。

異なる価値観との対話の重要性

芦沢： 異なる状況の人たちのことを理解するには、異なる背景を理解し、共通の接点を見つけたり、共通の言語を築いたりしながら対話していく必要があります。この対話の力を持つ人と、諦めがちな人との違いはどこにあるのでしょうか？

右田： 専門職としての価値観は様々であり、それぞれ異なるものです。だからこそ専門職同士が共通の言語で話し合い、相互理解を深めることが必要だと感じます。クライアントを中心に置いて、協力し合うことで解決策を見つけるためには、その専門職の価値観を理解し合うことが鍵だと思います。

太田： 何が大切かは、他職種との連携や協力だけではなく、お互いの仕事に対する価値観を理解し合

うことが重要だと感じます。ケース会議などでの連携が、課題解決だけでなく、お互いの考えや価値観を共有する場になるよう努める必要があります。

右田： 専門職の本音で語り合う場が存在しないことが問題だと感じます。ケアマネージャーたちの仕事において、もっとも重要なことは他職種との良好な関係構築であり、それにはお互いの考えを理解し合うことが不可欠です。

組織や地域で対話の場をつくる

芦沢： 組織を代表して参加する場合、組織の意見がプレッシャーとなり、自由な発言が難しくなります。本来は参加者が自ら会議を望むような場を作り上げる必要があります。自分たちが主体的に参加できる場を作り上げ、そこで自由に意見を交換することで、新しいアイデアや取り組みが生まれると思います。

太田： 地域の中で「あの人からのお願いだから…」と貸し借りが成り立つような関係性を作っていくことが大事です。何かで定められているからやる会議ではなく、参加したい会議をどのように作り上げるのか。

芦沢： 市民活動やボランティアでは、参加してくれる人たちにお金で報酬が払えない時、お金以外の報酬に注目しています。何故ここに来てくれるのか、何を知りたいのか、誰とつながりたいのか、といった方針を確認し、それが満たされるかどうかをマネジメントしていかないと、市民活動はうまくいきません。

太田： 確かに、そのようなマネジメントが必要ですね。参加を促すだけでなく、参加者が得る報酬やメリットに着目することが重要です。

右田： 知識やつながりなど、参加者が持ち帰れる何かが必要です。専門職が地域の社会資源として活用され、新しいものを生み出せるようになれば、地域全体に良い影響を与えることができるでしょう。

ソーシャルワーカーを目指す人へのヒント

芦沢： ソーシャルワーカーを目指す学生や悩んでいる人たちにどんな武器が必要か、何かしらのヒントをいただけますか？

太田： 単純に、「あの人みたいになりたい」と思う人を見つければいいと思っています。どんな人でも良いが、憧れの人を頭に描くことで、その人の特徴やスキルを分解し、その成り立ちを理解していく。「あの人みたいになりたい」と思うことが目標を見つける第一歩であり、自分がどこに向かっているかを考える助けになると思います。

芦沢： ロールモデルを複数持つことも大切ですね。



太田： そうですね。ある人の一部分だけを見習いたいということもありますし。見習いたいと思う人が近くにいて、背中から学ぶことも大事だと思います。

芦沢： 山梨に、誰かにとって憧れられるソーシャルワーカーが増えることが望ましいですね。

太田： 学校の先生がそのような憧れのソーシャルワーカーを紹介することが重要であり、生徒たちがそうした出会いを通じて自分の将来を見つける手助けになります。

目の前の一人を幸せにすることから

右田： 社会問題に対して真剣に取り組む大人が少ない環境で、子どもたちに社会の問題に目を向けるよう求めることは難しいです。まずは子どもたちが自分自身を満たすことが大切であり、その上で社会に対する関心や行動が生まれるのではないのでしょうか。

太田： まず目の前にやってくる人を幸せにできれば良いのです。しかし、その実現が難しいからこそ、もっと大人たちは関わり、支え合う必要があります。

社会の問題に取り組む前に、子どもたちが自分を大切にし、その上で社会に対する興味や行動が生まれることが重要です。大人たちもポジティブな感覚を大切にし合い、お互いを尊重する社会を築くことが求められています。

芦沢： 日本の若者たちが社会に対して貢献できる力を持っていると感じにくい現状があるため、社会に目を向けることが必要だと言われても、その無力感を感じやすいです。社会に目を向ける前に、まずは自分自身を大切にすることがあるということですね。

本日はありがとうございました。



Profile

右田 達さん(左) 山梨県でケアマネージャーをしている右田さん。甲府市羽黒町にてコミュニティハウスはぐる・うを2023年3月にオープン。地域の人たちの共有財(コモンズ)を大切にしながら地域づくりを行っています。

太田 隆康さん(右) 岐阜県で独立型精神保健福祉士事務所の相談室あめあがりを立ち上げている太田さん。日頃、精神疾患や発達障害を抱えた人たちの仕事や生活の相談に乗りながら、社会に対して働きかけているソーシャルワーカーです。



◀ 右田さんが立ち上げたコミュニティハウスはぐる・う

社会的処方の実現へ 対話を持つ可能性

対談者 広石 拓司さん (株式会社エンパブリック代表取締役)
／芦沢 郁哉 (NPO法人bond place 理事)

実施日 2024年1月19日 (日) @根津スタジオ



「システム思考」を使った
グループワークの様子 ▶



家族や地域コミュニティの在り方が変わるにつれて、孤独・孤立がより社会の中で深刻化していくことが予測されます。山梨では表立って孤独・孤立対策に取り組む人が多いとは言えませんが、コミュニティ活動などをしていきたいと考えている人が潜在的にはいるのではないかという思いから、私たちは社会的処方の学校を企画しました。

今回の対談のゲストである広石さんには、社会的処方の学校の中で「システム思考」の講師などで関わっていただきました。3年間で受講生にどのような成長や変化があったのか、それぞれに共通して持っている課題感などに触れながら、今後の話をお聞きしました。

受け入れ側の問題が ずっとテーマと感じていた。

芦沢: 社会的処方の学校の取り組みを、どのように見ていましたか。

広石: 今回、いいなと思ったのは、通常であれば医療側やサプライヤー側に気持ちが行きがちなところを、bond placeは地域の活動をとにかく作ります、としたところですね。

本当に色々な人たちが、自分で活動しなきゃと思ってやり始めましたという話を、リアルタイムに捉えて、地域側を活性化させることで、医療者だけでなく、地域の力が社会的処方の実装を進めるんだということが証明されました。

芦沢: 「人ってこういう風につながっていけるんだ」と受講生が言っていたのが印象的です。

広石: 地域包括ケアでの課題もそうなんですけど、例えば「何でも相談してください」ってみんなチラシを作り、黒板に貼ってみるけど、結果的に誰も来ませんでした、みたいな感じで終わる。それは、知らない人に自分のプライベートは相談できないからで、それでも相談に行く人はよほど状態が酷くなってしまった場合が多い。だから、先にその相談をするための環境整備があるし、仕掛けも用意すべきなんですけど、意外とそこがみんな見落としがちなんです。

芦沢: そういったことに取り組み始めている人も少ないですね。

広石: そう、全体的な量が足りない。加えて、それがシステムチックに整備がされていない。だから、いつになっても受け入れのルートが作れない。でも専門職になればなるほど、地域は何とかなるでしょ

と楽観的に考えていて、地域が一番なんともなりません(笑)ってギャップがあります。

地域での活動をオーガナイズするのがすごく大事なものであって、そこそが日本社会の様々なところに存在している課題ですね。そういうのが本当に苦手で、それが今、受け入れ側になる地域社会に欠けているピースだと思います。

社会的処方の学校で 提供できていたこととは

芦沢: 本格的に対話が社会に求められてきたっていう感覚があります。

広石: 我々もそう思ってきたし、何だっって対話で解決できるよっていう風に考えてきました。だから流行りのSNSを選ぶように、対話を選ぶっていうところになってほしいけど、残念ながらそういう見せ方ができてない。

芦沢: 多くの人の選択肢になっていないということですか。

広石: 少なくとも簡単ではない。パッと選べる状況とか、パッと効果に分かるとか。今の地域活動をしていて、参加者が足りないですという時に、真っ先にSNSするみたいな話が出るじゃないですか。同じように「先ずは対話しようか」となってほしいですね。

U理論で言われているように、一度深く自分を見つめ直さないと、次のステージはいけないんですね。それをSNSで代用するのは難しくても、対話が選択肢になってないというのは大きな課題でもあり、地域の損失でもあると散々言い続けています。

芦沢: 結局、社会的処方の学校で、私たちは何が提供できていたのでしょうか。

広石: 参加者にとっては、先に進めようとしてくれ

ているっていう体験だったと思うんですね。ビジネスプランコンテストとか出たら、事業計画やマネタイズのところでダメ出しされるじゃない。

でも、bond placeの場に来れば、もっとできるよって言ってもらえる。そこが、bond place的な良さでもあり、かといって「いいっすね!」みたいな軽い感じでもなく、ちゃんと真面目に前向きに行けるんじゃないかとか、自分の考えていることに可能性があるんじゃないかとか。そこが、みんながすごく信頼して、頼ってくれるところだよなと思います。

真面目に話を聞いてくれて、本当に今の課題を解決できたか分からないけど、どうやらシステム思考とかループ図が書けた。そして、どうやら私の問題意識は間違えてないみたいだし、広石さんにも言ってもらったし、みたいな感じになると、めっちゃエンパワメントされました!となる。

芦沢: 参加者にとっては、今までの自分の経験であったり、自分のつながりが、評価されて嬉しそう瞬間が多くありました。

広石: つながりの評価、そうだと思います。自分がやってきたことを、きっちりポジティブに見てもらえる。逆に言うと、中間支援がしっかり課題解決をしなきゃいけないと思いきや、さながら、先を進んでいて、色々な社会のことを知ってるような人が、いいですねって言うてくれるっていうことが、シンプルに嬉しい。

芦沢: 活動している人そのものだけでなく、その人の周辺に、もっと何かできるんじゃないかなと思っています。

広石: だから、対話をもっと様々な場面で組み込もうと思うんですね。対話だけでは確かに課題解決はしない。でも前向きになるよね。課題解決じゃなくて、無責任でもいいから課題解決に前向きになる人を増やしたいんだっていうところを大事にしたい。本当はある種の無責任さというのが、自由な関わりを広げるオープンさを担保することにつながっているにも関わらず、ワークショップや対話もすぐクローズなものになってしまうが。

自分の言いたいことを言える場になっていることが大切だと思います。

改めてこれからの社会に 必要な対話とは

芦沢: いろんなところで対話をやってきて、機能的なファシリテーションに興味を持つ人が増えました。

広石: 今回、bond placeが専門家じゃないところで、社会的処方を受けたことの意味というのは、実はかなり大きくて、医療側ではなく地域側からやろうとしているというのが面白い。

さらに、コーディネーターやファシリテーターよりも中立的な立ち位置があって、bond placeがそこに徹することが、実は社会的処方というものを地域に根付かせていく時の、大切なポイントなんじゃないかなと思っています。

芦沢: 3年間、取り組んでみて、結局は対話力がベースになることを私も再認識しました。

広石: 日本人は「社会」とか「ソーシャル」って言うとか、なにか仕組みとかだと思っちゃう。行政、制度とか、社会システムみたいなものを、社会って言葉で考えちゃう。でもSNSのS(ソーシャル)というのは、人のつながりって意味じゃないですか。

だから社会的処方というのも本当はそういう意味がすごく強い。でも日本人は社会課題解決といった瞬間に、顔見知り関係をつくるというよりは、社会の構造的な問題とか、社会の仕組みとか、いわゆる社会問題みたいな感じのことを扱うっていうような人が、社会起業家だと思ってる。「すごい問題解決策、持ってます!」みたいな感じなんだけど。

もっとみんなシンプルに考えて、ふわっとした、合理性だけでない安心感とか、ちょっと前のめりになりなれない気持ちとか、ソーシャルインテリジェンスみたいなものがないダメだと思います。

逆に言うとbond placeみたいなところが、資金分配団体とかも巻き込んで、対話の場づくりに絡むことで、事業立ち上げ時に当たり前に対話が入っているってことの意味は、すごくある。

芦沢: どうやったら地域に軸足のあるファシリテーターが各地に生まれるかっていうのが、改めて見えてきたテーマだなと思っています。

広石: そこは最近改めて思うところです。ずっと住民主体の話なんかで言ってきたけど、やっぱり人はできると思わないと、関わってくれない。ゴミ拾いとかだったら自分ができそうだな、役立ちそうだなってイメージ湧くから関われる。

だから、急に対話とかワークショップと言うとちょっと難しそうと思ってしまっただけで、自分が発言したことがみんなにすごく役立つんだって経験でき

たら、一気にハードルが低くなるんだと思います。

芦沢: これからのファシリテーターやコーディネーターはどういうふうにあるべきですか。

広石: 「自分だけじゃ難しい」とか「力を貸してほしい」と言えることが大切な。地域側の課題でもあるけれど、実は専門職側にとっても大きな障壁になっている。力を貸してって、お互いに声を掛け合えるっていうのは、日本ではすごく難しい。

芦沢: でも、その難しいということからはじめないと、対話なんてできない。できて当然と勘違いした時点で、対等な関係性は絶対に成立しないですね。

広石: そうそう、だから、悩みを言ったら誰かが受け止めてくれて、そういう関係性にとても慣れている人もいるけど、多くの人は慣れていないんだと思います。

対話に積極的な人は未だ少数派で、苦手に思っている人が多いと思うんですね。社会的処方も含めたソーシャライズするっていう言葉がどう浸透するのか。対話を通して個人としてどう自己開示をしていくのか、そして、その対話にどう参加してもらおうのかを考え続けることが必要です。

芦沢: ベーシックとして対話は必須で、その上でより地域がシステムの動くにはどうするのかということをもっとみんなで考えていかないといけないですね。

広石: 他者との関係性が自分の力になるし、つながりや関係性を通して、課題発見だとか、お客さんを見つめるだとか、支援者を見つけるってことができるものだと思います。そういう「つながりを力に変える力」みたいなものが必要なんじゃないか。

実はみんなギブしたいっていう気持ちがあると思う。それに気づいて、まだまだたくさんいる関われない人をどう活かすのかという発想に変わるといいのではないのでしょうか。逆にいうと、ファシリテーターは地域の人たちのギブしたいっていう気持ちとか、その姿勢を理解しないと対話がうまくいかない。対話をもっと可能性があるし、私たちはもっとつながって、対話に取り組める場を増やさないといけないと思っています。

▼ 第3期 講座の様子



Profile

広石 拓司さん エンパブリック代表取締役、ソーシャル・プロジェクト・プロデューサー
東京大学大学院薬学系修士課程修了。シンクタンク、NPO法人ETICを経て、2008年株式会社エンパブリックを創業。「思いのある誰もが動き出せ、新しい仕事を生み出せる社会」を目指し、ソーシャル・プロジェクト・プロデューサーとして、地域・企業・行政など多様な主体の協働による社会課題解決型事業の企画・立ち上げ・担い手育成・実行支援に多数携わる。近著に「SDGs人材からソーシャル・プロジェクトの担い手へ〜持続可能な世界に向けて好循環を生み出す人のあり方・学び方・働き方」。東京都生涯学習審議会委員、慶應義塾大学総合政策学部、立教大学大学院などの非常勤講師も務める。 <https://empublic.jp>



子ども若者が自ら課題を解決する力を持てる地域づくりとは？

対談者 青木 直子さん(プログラムオフィサー)／栗原 咲子さん(評価アドバイザー)／芦沢 郁哉・加藤 香・野口 雅美 (NPO法人bond place 理事)

実施日 2024年1月19日(金) @ドットワークPlus

社会的処方の学校は、地域の若者たちが自ら課題解決する力を持つことを目標に掲げ、山梨県と長野県で展開された休眠預金事業のサポートを受け、実施されました。地方の特性を生かし、限られた母数の中からも地域課題に立ち向かう若者を育成するため、多様な分野からのロールモデルを参考に、主体的な環境づくりが求められました。この対談では、社会的処方の学校の裏側に関わっていただいた方々と事業担当者たちが、三年間の取り組みを振り返り、今後の地域づくりへの展望を語ります。

参加者も主催者も一緒に「私たちにできること」を考えるプロセスを大事にできた。▼



Profile

青木 直子さん(右) 認定NPO法人富士山クラブに所属。今回はプログラムオフィサー※1として、社会的処方の学校の開催に関わっていただきました。共に社会を変えていくパートナーとして伴走してきた立場から、社会的処方の学校の成果や今後の展望を話していただきました。

栗原 咲子さん(左) 休眠預金事業では事業の事前・中間・事後のタイミングで事業評価が行われました。そのタイミングでアドバイザーとして関わっていただいたのが栗原さんです。日本評価学会の認定評価士の資格も持ちながら、様々なNPOや市民団体の支援をしてきた栗原さんの視点をいただきながら、社会的処方の学校がちゃんと目的に向かって進んでいるかを確認し、事業の改善をしてきました。

プログラムオフィサー※1 助成を行う機関に配属され、助成プログラムの立案や案件のリストアップ、公平な審査プロセスのマネジメント、助成プログラムの評価等を行う専門職のことで。休眠預金事業では、実行団体の運営や活動をサポートする非資金の支援(伴走支援)が特徴となっており、各団体への伴走支援をプログラムオフィサーが中心となって実施しています。

自ら地域課題解決に向かっていけるようになるために、まず私たち大人がやらなければならないことがたくさんあるだろうと。

芦沢: そうですね。最初に感じたのは、大人が全てを用意してから若者を招くのではなく、若者自身が主体的に動けるような環境を整えることの重要性でした。地域課題解決と言っても、1人でできることには限界がある。だからこそ、学ぶプロセスから1人じゃなくてみんなと一緒に取り組める場が必要だと思っていました。これまでいろんな場所でワークショップをしてきた私たちだからこそ、子ども若者だけではなく、大人も交えてみんなで学びながら活動を始めてみる、そんな対話型の場づくりが必要だと思っていました。

青木: その通りです。自ら課題を解決できる力をすでに持っている人は、もうとっくに行動できています。なかなか一歩踏み出せないんだという人たちが仲間たちと一緒に成長し、変化していくプロセスが重要です。

芦沢: この事業が生まれてもう三年が経とうとしています。過去と現在を比較して、新たに気づいたことや変化した点があれば、ぜひ共有してください。

青木: 社会的処方の学校をそばで見えてきて、孤立や孤独に対する現場感覚を持ちながら、起業支援等で培ってきたノウハウをもとに伴走支援をしているんだと感じていました。ファシリテーターとして人と人のつながりを生み出し、自分たちが学んできたものをうまく取り入れながら講座に落とし込んでいる。そういうプロセスを通して、ただの講座ではなくて、参加者と一緒に成長していくというのがbond placeの強みなんだと思います。

加藤: 社会的処方の学校をとしての1番の気づきは、複雑な問題をそのまま受け入れ、共に学び合うことの価値です。答えを教えてもらえるのを待つのでは



◀左から加藤香、栗原咲子さん、青木直子さん、野口雅美

なく、社会的処方の学校の参加者同士で学び合いながら、それぞれが自らの現場で実践し、またその経験を社会的処方の学校の中で共有するというサイクルが重要でした。

栗原: 本当に、社会的処方の学校に参加する皆さんの自発性と内発的な動機が、この取り組みの成功を支えています。bond placeの人たちが関わることによって、それぞれの想いや願いが刺激されていく。普段なかなか人に見せないような自分自身の根っこ部分を触れていくことが、ふかふかの土壌をつくることにつながってくる。こうやって一生懸命に土を耕し、水を与えていくことで安心して芽が出せるようになる。私からはこんな風に見えていました。

地方の特性を活かした社会課題解決の担い手づくりとは？

芦沢: 私たちは地方である山梨県の特性を生かしながら、若者が少ない環境でも地域課題に立ち向かう力を育む必要があると感じています。

野口: 事業の評価とか成果とか以前に、地域の取り組みの量とスピードが足りないことが、社会的処方の学校を開催する必要性の根拠の一つでした。特に地方では活動自体が多くないので、一つの分野だけではパターンやノウハウが見えてこない。またこれまでの起業支援の枠組みの中では、参加者と講座開催期間の三〜四ヶ月ほどしか関わることができなかった。でもこの社会的処方の学校では、講座の時だけではなくいつでも連絡くれていいですよと腰を据えて三年間関わることができた。

青木: 地方は同質性が高く、情報も少ない傾向があります。そのため、異なる分野の人との交流や学びを求めて「どこか別の場所に自分で学びに行かなきゃ」って思うんだけど、探してもなかなか見つからない。

加藤: 人と出会うにしても、そこには仕掛けが必要なんです。ただ単にコワーキングスペースを作るだけで人が集まってくるのではなく、適切なタイミングで人々をつなぐ役割を誰かが果たしているから人が集まってくるのです。

青木: 同質の集団では「こうあるべき」という固定

概念に縛られてしまい、新しいアイデアが生まれにくいんです。しかし、異なる分野の人と話すことで、視野が広がります。社会的処方の学校でも異なるバックグラウンドを持つ人々が集まって話すことで、新たな気づきを得ることができた人がたくさんいるのではないのでしょうか。

芦沢: 地方では数打てる機会が少ないため、一回一回の出会いや経験の質が重要になります。たまたま出会ったこの機会を「運命かも」って思えることで、より相手の話を深くまで聞くことができますし、そこからどんな小さなことでも学んで帰ろうって思える。そういう姿勢で関わってくれたら、つい色々なことも教えたくなるし、チャンスがあったらこの人に渡したいなって思う。チャンスがたくさん巡ってくる人には、この「運命を信じる力」みたいなものが共通しているかもしれないですね。

加藤: bond place はあくまでもファシリテーションの集団なんです。適切なタイミングで介入し薪を焚くに行く。手放すときはすぐ手放す。この入る時、引く時というのはすごく意識して関わっています。

芦沢: 自分自身が変わることがきっかけとなって、周囲も変わっていきます。社会的処方の学校は、対話を通じて自分自身を見つめ直すことでまず自分が変わる。それに影響されて周囲との関係性が変化し、自ずと行動変容につながります。

栗原: 確かに、信頼関係と場のしつらえが大切です。絶対的な安心や信頼がこの場にあることで、参加者同士は普段ではなかなか話せないこと、考えていないことに触れることができるのではないのでしょうか。

芦沢: 子どもや若者のエンパワメントという視点に戻ると、若者たちが自ら課題を解決しようと頑張っている大人のそばにいられるようになることが重要ではないかと考えています。自分のやりたいプロジェクトが生まれる前の段階で、地域や社会のことを考えながら試行錯誤している大人たちと出会い、一緒に対話しながら社会や自分自身のことについて考える機会を作ること、自ずと地域課題解決に向けたプロジェクトの種が生まれてくる。

この三年間で出た芽をどうやって育てていくか？

芦沢: この事業の目標は、子どもや若者が自ら課題解決する力を身につけ、それを地域全体に広げることでした。今後、この目標に向かって進むために、重要なポイントは何だと思いますか？過去三年間で見えてきた小さな芽をどうやって大きく育てていけばいいのでしょうか？

加藤: 社会的処方の学校参加者の中で、自己評価の中身が変わった参加者がいました。自分の活動に来てくれた人が楽しかったかとか、満足したかといった表面的な感想ではなく、その活動を通じて何が変わったのか、どのような影響があったのかを捉えるようになったんです。これは、社会的処方の学校の参加者の意識が変わっている証だだと思います。

青木: 実際に活動を終えた後に残るもの、つまり私たちの行動が社会にどのような変化をもたらしたのかを考えることが大切です。何が残ったのか？どこが変わったのか？何が次につながっていくのか？などを意識していないと、ずっと同じことを繰り返してしまいます。そしてそのうちに消耗して続けられなくなってしまう。ただ活動を行うだけではなく、その先にどのような意味があるのか、どのような社会的影響を与えているのかを常に意識する必要があります。

栗原: 活動の目的と方向性を正確に把握することが非常に重要です。そこらへんがズレないことがすごく大事。

芦沢: NPOの存在意義とは、社会課題の解決に向けて、より多くの人々が関わるができるプラットフォームを提供することにあります。単に活動を楽しむだけでなく、社会全体にポジティブな影響を与えることを目指しています。

野口: NPOが行政とは異なるアプローチで課題に取り組むことの重要性について考えさせられます。行政の手法では解決できなかった問題なのだから、問題分析をして、仮説を立てながら進めていくことがすごく大切です。行政の指示通りやるだけでは、ただの下請けになってしまう。NPOには新たな視点で捉え直し、根本から問題解決を図ることのできる能力が求められているのかもしれない。

栗原: 長期的な視点で伴走し、地道な活動を続けることが成功の鍵です。風邪をひいたときに風邪薬で熱を下げるのはすごい簡単。行政も含めてどうしてもそういう解決策に陥りがちだと思っています。やはり免疫を上げるために、どれだけ粘り、耐え、みんなで頑張れるかが問われている。免疫を上げるにしても、血液液なのか筋肉液なのか、この人のメンタルなのか、人によってアプローチは違う。この違いをちゃんと見極めてアプローチするには、時間をかけて伴走することが、これからも重要なんだと思います。

